

の點について、二三の例を擧げて説明を試みなければならぬ。

先づ注意すべきことは、前述の如く、我が國に最初に傳はつた學問が、論語を始めとし五經の學即ち儒教であつたことである。儒教はいふまでもなく支那の孔子の教で、その子弟が相ついでこれを祖述しその精神は仁道を行ふことに存し、教ふところは修身齊家に始り、治國平天下に終るのである。誠に古人の道德として國政の方針として、申分の無き理想的の教である。けれどもこの教は治國平天下の爲には所謂革命を認めて居るのであつて、君主が道を失ひ、仁道に戻る政治をすればこれを滅ぼして新に有徳の君主が立つことを承認して居るのである。これは即ち支那の君主といふものに對する根本の觀念に本づいて生じた考である。儒教の認むる支那の君主即ち天子に對する觀念を見るに、凡そ宇宙を主宰するものは天で、天は萬物を育成するものである。天子は天の子で、天に代つて民を撫育するもの、天の命を受けて政に當る者に外ならぬ。だから君主は有徳の人で仁政を行ふものでなければならぬ。徳薄く不仁の君主は天命に背いたもので天子でない、尙書の泰誓に、「古人有言、撫我則后、虐我則讐」とあるのは即ちこの考を平直にいひ表はしたものである。従つて不仁の君主が出るとこれを退け、新に何人^{チアダタリ}にても天命を受けたものが之に代るべきであるといふのである。漢の董仲舒の春秋繁露といふ書物に「天子不能奉^{スル}天命^ヲ則廢^{チス}」とあるのも、また極めて明白にこの考を述べたのである。かくして前朝を倒して新しい朝廷の起るのが所謂革命である。かゝる革命を承認する教が、學問として道德の教として早くも大陸文化輸入の劈頭に於て我が國に入り來り、古き時代より、特に著しくは徳川幕府の時代に於て、國民道德の標準として全國に講ぜられたのであるが、然も我が國に於ては、これを忠孝仁義の道、修身齊家治國平天下の教としてこそ受け入れられ、かゝ